

呉乞買が入って来た。怒りに顔が紅潮している。

「兄者、俺はすぐ行く」

怒鳴るような声だ。

「分かっておる。儂も行く」

呉乞買は、一瞬驚いた顔をした。

「兄者もか。なら、遼はどうする。軍紀違反に問われるぞ」

「分からんように動く。迅速に発ち、迅速に戻る。出す兵も少しにする」

「太原府は大きな城郭だ。廂軍で二万はいる。禁軍も五千以上いるはずだ。そんな中に、どれだけ出すつもりだ」

阿骨打は目を閉じている。

「五百」

呉乞買は目を剥いた。

「そんな数で足りるわけがない。兄者、宋雪華を見殺しにするのか。見損なったぞ」

「出せるのは五謀克までだ。それ以上だと遼に知られる。今は大事な時だ。遼を刺激してはならん」

「だが、宋雪華が捕らえられたのは、おそらく俺達のせいだ。それを助けなくて何の独立だ。そんな独立なら、俺はほしくない」

呉乞買の目には、うっすら涙が浮かんでいる。

「呉乞買、宋雪華は殺されたと決まったわけではない。我が女真の民は、多くの者を殺されてきた。我らの独立を、そのように言うてはいかん」

「だけど……」

「硬軍を出す」

「黄頭女真を……」

呉乞買は絶句した。

「そうだ、硬軍が五謀克※あれば、禁軍としてその十倍は撃破出来る。それに、ことは公のものではない。廂軍であろうと禁軍であろうと、その一部しか動かせぬだろう。一気に叩けば十分勝機はある」

※謀克 三百戸を一単位として、そこから百人の兵を出させる制度。

転じて、百人を単位とする部隊。完全に制度化したのは金建国後

「硬軍ならば。分かった兄者。俺はすぐに発つ。一謀克で先行する」

「いいだろう。儂は長兄の烏雅束うがすに後事を託してから出発する」

呉乞買が心配そうな顔をした。

「大丈夫だろうか、大兄者で」

「心配するな。おまえは宋雪華を助けることに専念するのだ。もしも宋雪華の身に万一のことがあつたら、呉乞買、太原府を火の海にしてやれ」

「任せてくれ、兄者」

呉乞買は飛ぶように幕舎を後にした。

三人は牢営の鍵を開けた。牢番は二人とも気を失っている。袁偉が言っていた通り、死んではいなかった。

「何か嫌な臭いがする。雪華姉ちゃん、大丈夫だろうか」

石勇が心配そうに言った。

扉が開いた。中は真つ暗で、物音一つしなかった。曹瑛が牢番の近くにあった燭台を持って来た。牢営はかなりの広さがある。

「曹瑛、入るぞ」

李達の声も緊張している。生きているのか。それを心配しているのだと、曹瑛は思った。

ちらちら揺れる灯りの先に、燃え尽きた薪まきの跡が見えた。曹瑛は丁洪の言葉を思い出した。雪華姉さん。心の中で、雪華の無事を祈った。

「いた。嬢さん、しっかりするんだ」

李達の太い声が響いた。

雪華は、太い麻縄で両手を縛り上げられていた。上半身の胡服を剥ぎ取られ、身体の数箇所あちこちに大きな火傷の痕があつた。曹瑛は息を呑ん

だ。ひどい。ひどすぎる。あの美しかった雪華姉さんを。曹瑛は必死で涙をこらえた。

「息がある。助かるぞ」

李達が声を上げた。曹瑛の後ろで大きな音がした。石勇がへたり込んでいる。

「よかった。姉ちゃんは死んでるんじゃないかって思ってたんだ」

緊張の糸が切れたらしく、石勇は涙声になっていた。

「命はあるが、危険な状態だ。儂が背負っていく」

李達は麻縄を板斧で切り、そつと雪華の身体を背に負った。曹瑛が雪華の身体に自分の衫きんをかけた。雪華は気を失っている。当たり前だろう。よく生きていてくれた。雪華姉さんは強い。

「こんなところに長居は無用だ。曹瑛、どこか隠れるところはないか」「わたしの蔵ではすぐ見つかるし。小父さんのところは隣だし・・・」

「嬢さんの手当てがしたい。静かで涼しいところがいい」

「あるわ。蔵から少し離れたところに家を借りてあるの。あそこなら、まだ誰も知らないはず。奥の厩うまやには水月もいるわ」

「よし、そこに行くぞ」

李達は雪華を背負って走り出した。人を背負っているとは思えぬ速さだった。

月の光が辻を照らし出している。李達は走りながら、雪華の呼吸を感じていた。何か薬で眠らされているらしかった。呼吸は、ゆっくりだが十分な深さがある。危険だが、今すぐ命に関することはない。李達はそう思った。これまで、多くの死に行く者達を見てきた。

そういう者の呼吸は、大概速くて浅いものだ。

「あそこよ」

一刻ほどして、曹瑛が木に囲まれた家を指差した。周りに人家はあるが、城郭内にしては閑静な場所だった。

「よし、ここに隠れよう。曹瑛、嬢さんの手当てにな物を用意してくれ」

「小父さんの家にあるわ。わたしの蔵は荒らされていると思うの」

「石勇、曹瑛を守るのだ」

李達の言葉に、石勇は素直に頷いた。今や、李達の言葉は絶対だった。

二人が出て行くと、李達は雪華を横たえた。曹瑛はここをほとんど使っていないかったようだ。寝具などは新しい物が揃っている。

「出来るだけ早く、医師の手当てを受けさせねば」

李達は溜息とともにつぶやいた。

一睡もしないうちに夜が明けた。三人は、疲れも忘れて雪華の容態を見守っていた。手当ては曹瑛がした。清潔な布、傷を保護する油などはおおよそ間に合った。新鮮な水だけは、夜の間石勇が汲んでいた。曹瑛は頻繁に布を換えた。傷口から毒が入らないようにするためだった。曹瑛がいてくれて助かった。李達はそう感謝した。曹瑛は賢く、様々なことを知っていた。傷口から流れ出た以上の水がいると言って、雪華に口移しで水を与えた。今は滋養が必要だと言って、肉を煮立てて汁を作った。火傷には肉の汁がいいとどこかで学んだようだった。出来るだけ早く、肉そのものを食べた方がいいとも言った。傷の治りに差が出るらしかった。身体の内側が傷んでないので、それが可能なのだろう。李達はそう思った。骨や内臓に異常がないことは確かめた。しかし、痕が残ることは避けられない。火傷の場所によっては、動きに不自由することもあるだろう。何よりも、雪華は若い娘だった。自分の身体を見てどう思うことだろう。李達は、腸はらわたが千切れるような悔恨に襲われた。

「息が正常に戻ってきました」

曹瑛が、目を輝かせて言った。

ふつくらとした頬がこけ、血と汗で汚れてはいたが、曹瑛の目は輝いている。

「そうか、もうすぐ目が覚めるかもしれん」

李達が雪華の顔を覗き込んだ。

こんなに酷い目に遭い、こんなに汚れていても、嬢さんの美しさは損なわれておらん。強い娘だ。嬢さんも、そして曹瑛も。この娘達を守るために、儂はこれから生きていくのだ。黒い旋風つむじかぜとなつて。李達は、心の中でそう誓った。

夜も更けてから、魯權の屋敷での惨状が次々と報告されてきた。魯權をはじめ、多くの者達が殺されたという。生き残ったのは、魯權の妻子、手代、食客を含め両手にも満たないとのことだった。殺害された者は三十人近くにのぼるらしい。屋敷近くの空き地に穴を掘った跡があり、二人の男が埋められているという報告もあった。検分した役人によると、一人は大谷県都頭袁偉であるらしい。もう一人は商人ふうの男で、身元確認中ということだった。

「何ということだ」

黄文炳は臍ほぞを噛んだ。宋雪華への拷問を見て気分が悪くなり、寝付けぬまま酒を飲み続けていた。罪もない娘に、あんな酷い仕打ちをするからこんなことになるのだ。黄文炳は自分のことを棚に上げて魯權を罵った。かろうじて命を取り留めた食客から聞いたところでは、襲ったのは袁偉と商人ふうの男、それと若い娘だったという。娘は曹瑛と呼ばれていたらしい。そこから察して、商人ふうの男は、蒋唐という河間府から来た商人ではないかと推測された。

曹瑛という娘は、宋家村から派遣されている太原府の責任者らしかった。そして、蒋唐という男は、娘の隣に住み、普段から親しくしていたらしい。この二人が動くのは分かる。宋雪華を救おうとしてか、あるいは復讐のために魯權の屋敷を襲ったのだろう。臍に落ちないのは袁偉だった。なぜ袁偉が魯權を襲ったのかが分からない。これまでも袁偉を使ってきた。腕は立つが寡黙で、自分を表に出さない男だった。仕事を忠実にこなし、口も堅かったので、黄文炳には使いやすい者の一人だった。事後報告の時にも、変わった様子は見られなかった。それがなぜこんな大事件を引き起こしたのか。黄文炳にはどうしても理解出来なかった。

「都監は来ておるか」

「ここに」

太原府駐屯禁軍兵馬都監の馮湧が膝をついていた。

「ならず者一味が太原府を騒がせておる。おまえはこの者達を鎮め、捕らえるのだ。殺しても構わん」

「一味の人数は」

「分からんが十人程度だろう」

「それならば廂軍でも」

「すでに一営出しておる。廂軍は城内の探索、おまえ達禁軍は、城外で奴らの逃亡と仲間の加勢を阻むのだ」

「加勢があると」

「その可能性はある。もしかすると遼軍が来るかもしれん」

黄文炳はわざと遼軍の名を出した。馮湧という禁軍の將軍に、日頃から苛立っていたせいもある。京師禁軍殿前司の高俅との繋がりを見かけ、なかなか言うことを聞かないのだった。それに、万事にかけて動きが遅い。開封府の宰相蔡京と、殿前司の高俅との仲も悪い。そんなことも関係し、黄文炳の命令にだけ動きが鈍いのだった。

「とにかく一隊出すのだ。指揮はおまえ自身でやれ」

馮湧は露骨に嫌な顔をした。

「分かりました。ですが、本当に禁軍が出動する必要があるのでしょうか」

「そのようなこと、おまえが考えることではない。知府である儂の決めたことに従っておればよいのだ」

黄文炳は、怒鳴りつけたくなる衝動をやつとのことと抑えた。

早く蔡京閣下が高俅を追い落としてくれないものかと、心の中で祈った。そうすれば、たかが武官ごときに大きな顔をされることもない。

この国は、我々文官でもっているのだ。武官など、ただ命令に従うだけでいいのだ。戦がなければ、おまえ達武官なぞただ飯喰らいと変わらない。大きな顔はさせんぞ。それは宰相蔡京の方針でもあった。

馮湧は不満そうに出て行った。

次に、黄文炳は牢営※の管営※を呼び出した。管営は差撥とともに膝をついた。 ※管営 牢営の責任者 ※差撥 実際に牢営を管理する役人

「どうして娘を逃がした」

「獄子の話では、男が突然現れ鍵の所在を尋ねたとのことでした。獄子※が断ると乱暴狼藉をはたらき、耐え切れず魯大尽が持っていると言うと、二人は男に気絶させられたとのことでした」 ※獄子 牢番

官営が恐縮して答えた。隣で差撥も頷いている。

「娘がいることを知っていた者の仕業か」

黄文炳は、袁偉の仕業だろうと思った。

「その後のことは憶えておらず、牌頭に起こされた時には、娘はいなかったと言っております」

官営と差撥は深々と頭を下げた。

「もう下がってよい」

黄文炳が面倒そうに言った。

これ以上訊いても、何も分かりそうになかった。大筋は、袁偉と曹瑛という娘、それに商人の蔣唐の三人が魯權の屋敷を襲い、牢営※の鍵を手に入れ宋雪華を奪還した。そんなところだろう。分からないのは、なぜ袁偉がそんなまねをしたかという点だった。そんな男には見えなかった。魔がさした、ということか。黄文炳は無理やり納得しようとした。それにしても、魯權は周到な男だったから、当然屋敷の警備は厳しくしていたはずだ。それを破られ、二人の死者を出したとはいえ鍵を奪うとは、恐るべき奴らだった。食客達の数人に特殊な矢が突き立っていたとのことだから、曹瑛という娘の仕業だろう。袁偉は剣を使う。刺された死体もあったということだから、これは袁偉とみていい。二人、小刀によるものがあつたというが、掘り出された蔣唐という男が小刀を握っていたと報告があつたので、これはこの男の仕業だろう。前庁付近で死んでいた十五人と魯權、そして家宰の丁洪が誰に殺されたかは判然としなかった。むろん、魯戒の死を悼むつもりなどさらさらない。丁洪にいたっては、死んでくれて清々した。あの

男は完全に狂っていた。誰だか知らないが、殺してくれて感謝したいほどだった。

生き延びた食客の証言では、二人の大男が飛び込んで来たとのことだった。一人は顔が黒かったというから、宋雪華にいつもついていっている無用という男だろう。魯權と丁洪、それに十人の食客が首を飛ばされていた。五人の頭が潰されていた。その鮮やかな切り口に、検分した役人が驚嘆していたらしい。人の技とは思えないと。曹瑛という娘を含め、その三人は恐るべき腕を持っている。具冠ぐかんの一営だけで大丈夫か。黄文炳は背筋が寒くなるのを感じた。

「寶烈然とうれつぜんの一営も出せ」

黄文炳の命令は叫びにも近かった。

陳統は太原府の南門を見ていた。陽はすっかり昇りきり、城外に暮らす者達も、城門が開くのを待ちわびている。荷は、すでに隠し終えた。ここから四里ほど先の森の中だった。城門が開くのを待っている人々に紛れて、城内に入る算段だ。弦月を連れて行けば怪しまれる。空き家の裏にでも繋つなごうと思っていた。城門が閉じられるということはないだろう。賊が何百人も襲ったというわけではないのだ。それに、知府も魯權も公にしたいものではないだろう。陳統はそう思っていた。陳統は弦月を繋いでおける場所を見つけると、隠れていた路地から足を踏み出した。

「あれ、あいつは」

城門の前で馬に乗り、番兵に何やら怒鳴っている男がいた。洒落た緑の褲は※をはいた、遊び人ふうの若者だった。馬の扱いはかなりのものだ。起兄ちゃんや玉姉ちゃんには及ばないが、自分と同じほどには乗りこなす。そう認めた。陳統はこっそり男に近づいた。※褲ズボン

「おい、晁蓋ちやうがい」

陳統が後ろから声をかけた。

晁蓋はいきなり名を呼ばれ、驚いた顔で振り返った。

「何だ、陳統じゃないか。おどかさないでくれ」

「驚いてるのは俺の方だよ。何で、おまえがここにいるんだ」

「いちや悪いか」

陳統は言葉に詰まった。

「とにかく、こっちに來い。ここじゃ目立ちすぎる」

陳統は馬の手綱を曳いた。晁蓋も黙ってついて來た。

城門から離れると、晁蓋が訊いてきた。

「雪華を助けに行くんだな」

「どこで聞いた」

「館に残っていた伍氏に聞いた。昨日の夜だ」

晁蓋の顔には焦りの色が浮かんでいる。こいつはこいつなりに雪華姉ちゃんのことを心配してるんだ。そう思うと、晁蓋に少し親近感を覚えた。

「陳統、俺も行くぞ。雪華は俺の嫁になる女だ。俺が助けなくて、誰が助けるっていうんだ」

陳統は、さきほど感じた親近感をすぐに消し去った。

「城壁の中に入れば手がかりは見つかるはずだ。番兵の奴ら、開けるのが遅すぎる」

晁蓋は怒りで震えていた。

「あんなに目立ちちゃ怪しまれる。馬も置いていけ。俺に任せろ。必ず姉ちゃんを助け出す。俺は、おまえ以上に姉ちゃんを助け出したいんだ」

晁蓋はじつと陳統の目を見つめている。

「今だけはおまえの言うことを聞こう。だがな、俺はおまえより年長なんだ。もう少し敬意をはらえ」

「年長らしくしてくれたらな。今のおまえに、その資格があると思うのか」

晁蓋は返す言葉がなかった。

「とにかく、中に入る準備をしよう。ついて來るんだ」

二人は、城門とは反対の方に走った。

民家の裏手に入った。人は住んでいないらしく、家の中は静謐な雰

困気が漂っていた。

「夜のうちにここを見つけたんだ」

陳統が言った。

「馬は、ここに繋いどいていいな」

「ああ、俺の弦月も向こうにいるから、一緒に繋いでおけばいい。それに、その格好じゃ目立ちすぎる。こっちに来い」

陳統は家の中に入った。そしてあちこち家捜しをはじめた。晁蓋も入った。意外に物が残っており、最近まで人がいたらしい様子だったが、竈周りは荒れている。

「あったあった」

陳統が声を上げた。晁蓋が振り向くと、汚い作業着をかかえている。

「どうするんだ、そんな物」

晁蓋は悪い予感に襲われた。

「着替えるんだ。そんな格好じゃ怪しんでくれと言ってるようなもんだ」

「これを着るのか」

「俺も着替える。これが一番怪しまれない」

晁蓋は、古着に鼻を近づけて顔を背けた。

「ひどい臭いだぞ。こんな物着れるかよ」

「おまえ、姉ちゃんを助けたくないのか。姉ちゃんはもつとつらい思いをしてるかもしれないんだぞ」

晁蓋は口を閉じた。嫌そうな顔こそしていたが、黙々と作業着に着替えている。

「次はこいつだ」

そう言って陳統は、背負い籠を持って来た。

「この籠に野菜を入れて担ぐんだ」

陳統は家の裏に回って、野菜を籠に詰め込んだ。

「どこから持って来たんだ」

「夜のうちに、近くの畑から持って来た」

「それじゃ盗みと同じじゃないか」

「銅銭を置いてきた。箆の分も入れてき。二つ用意していてよかった。この箆に武器を隠すんだ。おまえの武器は」

晁蓋は、背にした柳葉刀りゅうようとうを抜いた。

「それなら隠せるな」

陳統は、懐ふとろから鉄の角棒のようなものを取り出した。長さは二尺※
余りだが、重さはかなりありそうだった。

※二尺 約四十四センチ。一尺は約二十二センチ

「何だ、それは」

「鉄扇さ。西夏の旅芸人から教わったんだ。先に刃を仕込んである。見た目より軽くて使いやすいんだ。広げれば矢も弾はじけるし便利だぜ」

「変わった武器だな。まあ、おまえらしいとは言えるが」

「俺は力には自信がない。石勇のような武器は使えない。起兄ちゃんだって、力のいらぬ流星錘りゅうせいを使ってるんだ」

「色々考えてるんだな」

「そうさ、物騒な世の中だからな。自分の身くらい自分で守らなくちやな」

「人を殺したことは」

陳統は少しの間沈黙した。

「あるよ。西夏で」

「そうか、俺もある。俺の場合は、つまらん賭場の喧嘩だけだな
二人は箆を担いで道に出た。顔に土を塗ることも忘れなかった。

城門の前にはすでに人だかりが出来ていた。早く城門を開けると怒鳴っている者もいる。二人は人ごみに紛れ込んだ。いかにも城内に野菜を売りに来た農夫といういでたちだった。

「門が開いたぞ」

誰かが叫んだ。番兵が出て来て、人々の検あらためをはじめた。

「いつもより厳しいな」

そう言い合う声が聞こえた。

「いつもと違う兵士だな」

そんな声も聞こえて来た。

検めはいつになく嚴重なものだった。だが、いつもの兵士でないということは、人々の顔を知らないということでもあった。うまくいく。

陳統は確信した。

「おまえの言う通りにしてよかったよ」

馬に乗った者が軒並みはねられるのを見て、晁蓋が呟いた。

「それでも、年長者だって威張ることが出来るか」

晁蓋は、陳統を見て苦笑いを浮かべた。

陽が昇るにつれ、城郭内は慌しい雰囲気にも包まれていった。暫く雨がなかったので、土も乾ききり、暑い一日になりそうだった。

「廂軍が動いておるな」

李逵は戸の隙間から外を窺っていた。

まだこの辺りに兵は来ていないが、遠くの方から住民の声や兵の怒鳴り声が聞こえて来た。

「曹瑛、嬢さんは動かせそうか」

「本当は安静にするのがいいのだけれど。息が落ち着いているから大丈夫だとは思いません」

「曹瑛、儂が嬢さんを背負う。紐でしっかりと縛ってくれ。石勇、手当てに必要な物や食料を背負うのだ。水もな」

「わたしは」

曹瑛が訊いた。

「おまえは、水月に乗って道を拓くのだ。儂らはその後が続く。腹に厚い布を巻き、その上に木の板を挟め。それをまた布で巻くのだ。恐いのは矢だ。頭には十分注意しろ。一番上の布は水で濡らしておけ。矢が通り難くなるし、武器にもなる」

李逵はそう言うと、脱出経路を考えた。

ここからなら西門か。だが、出たらすぐ汾水にぶつかる。船の用意

はない。やはり南門だ。蘇源にも南門を襲えと指示を出していた。南門を出た先には、森もあるし山もある。身を隠す場所に困ることはない。それに、李達には考えがあった。亀伏山のさらに奥に、李達の目指す場所がある。雪華を匿かくまい十分な手当てが出来る場所は、そこしか考えられなかった。運がよければ、あの医師がいるかもしれない。春と秋に薬草を採りに、あの場所に居つくことがあるのを李達は知っていた。後は運次第だ。李達は覚悟を決めた。

「用意が出来たら行くぞ。兵士が間近に来ておる。一軒一軒虱潰しらみつぶしだ」
曹瑛と石勇が、雪華の身体を李達の背に縛り付けた。落ちないように、かといって傷を圧迫しないように、曹瑛は入念に調節した。

李達は石勇を見た。

「石勇、僕は嬢さんを背負かかっておる。前と横は何とかなるが、後ろからの矢が怖い。おまえの役目は大事だ。矢の一本たりとも嬢さんに届かせてはならん。出来るな」

「兄貴、任せてくれ。雪華姉ちゃんのために死ぬるのなら本望だ」

「馬鹿者、死んだら水や薬はどうなる。死なないように頑張るのだ。」

曹瑛、矢は何本ある」

「水月の鞍に三百は」

「それだけあれば大丈夫だろう」

兵達の足音が聞こえて来た。

「曹瑛、水月に乗れ。おまえが先頭だ」

李達が戸を開けた。

曹瑛が頭を低くして、水月に乗ったまま戸をくぐった。

兵士が三人いた。いきなり馬と人が現れて、三人は棒立ちになった。

曹瑛が矢を放った。一人の手を矢が貫いた。残った兵士が驚く間もなく、また矢が飛んで来た。左上腕に突き立った。残る一人が背を向けた。曹瑛は矢を番つがえ、慎重に狙いを定めた。逃げ去る者を射るのは難しい。曹瑛は矢を放った。矢は風切り音をたてて逃げる兵の右足首に突き立った。兵士は前のめりに倒れ、土煙を上げて前に滑って行った。

「もう大丈夫」

曹瑛の声に、李達と石勇が飛び出して来た。

「死にはしないわ。暫くは動けなくなるけど」

「殺した方がいい時もある」

李達の言葉に、曹瑛は応えなかった。

曹瑛を先頭に、三人は人気のない通りを駆け抜けた。水月は時々後ろを振り返り、そのたびに走る速さを調節した。賢い馬だ、残月に似ているな。李達はそう思った。

辻を曲がったところに兵士の一団がいた。三人をみとめると、さつと緊張が走った。馬に乗っている男がいる。

「止まれ、おまえ達は何者だ」

騎乗の男が怒鳴った。着けている防具から見て、一団の指揮者らしい。百人以上の兵が、狭い通りを縦長に埋め尽くしている。

曹瑛は振り返り、李達の言葉を待った。

「突破するしかない。他の通りも変わらんだろう。曹瑛、馬の男を狙え」

李達は石勇に目配せした。石勇が一声おとおと叫ぶと、鉄棒を回して兵達の左に突っ込んだ。前にいた二人の兵が、横に弾け飛んで坊壁に叩きつけられる。そのまま崩れ落ち、人形のように動かなくなった。

兵達のどよめきが聞こえて来た。

「こ奴らだな。捕らえよ。殺しても構わん」

馬上の男が叫んだ。

石勇が兵達の真ん中に飛び込んだ。鉄棒を避けるように、石勇を中心とする円の中から兵達の姿が消えた。馬上の男も横に逃れた。

弓弦の音がした。馬上の男は咄嗟に朴刀を上げた。かんといい乾いた音をたてて、矢が逸れていった。

「押し包め」

その声に、兵達が力押しに押しして来た。石勇が兵達の輪に囲まれた。馬上の男が曹瑛に向かって来る。朴刀を左右に舞わせている。

「曹瑛、危ない」

李逵が叫んだ。

朴刀が唸りを上げて曹瑛の顔を襲った。

水月が馬体を回す。朴刀が空を斬った。

「小父さん、そっちに」

曹瑛の声は悲鳴に近い。

「曹瑛、石勇の援護を」

曹瑛は、石勇を囲んでいる兵に向かって矢を放った。続けて四人の兵が倒れた。その隙を逃さず、石勇が鉄棒を振るう。五人が飛ばされ、三人が肩を潰された。石勇は水月の前に出た。

「遠くの敵は任せて」

曹瑛がそう言って、二度矢放った。矢は正確に二人の兵の首を貫いた。兵達が数歩後退するのが分かった。

「瑛姉ちゃん、覚悟が出来たようだね」

石勇の声は弾んでいる。

「それじゃ、俺も頑張らないと」

石勇は水車のように鉄棒を回した。鉄棒に触れた兵達が次々と吹き飛んでいく。兵達の間には動揺が走った。

「ちっ、不甲斐ない」

馬上の男が舌打ちしながら李逵の前に出た。

「おまえが背負っている者、知府様の言われていた娘だな」

「黄文炳の手下か。廂軍にしては骨がありそうだな」

「儂は具冠。おぬしら大人しく縛につけ」

「嫌だと言ったらどうする」

「捕らえよ」

具冠の左右から二・三十人の兵が飛び出して来た。李逵は一度すと身体を沈めた。発条のように李逵の身体が跳ね上がる。地に降り立った時、五つの首が宙に舞っていた。李逵はそのまま兵の中に突っ込んだ。独楽のように李逵の身体が旋回する。それも、背に負った雪華の身体を庇いながら。首が飛ぶ者、腕が落ちる者、足が転がる者、李

達の周りに血煙が充満した。

「きさま、儂と勝負だ」

「来い。この黒旋風、おまえごときに臆しはせん」

「黒旋風……」

具冠は一瞬驚いたような顔をした。

「何を寝言のようなことを言っている。黒旋風がこんなところにいるわけがないわ」

具冠が馬を駆り立てた。

李達は身体を低くした。具冠が朴刀を振り上げる。馬が、李達を踏み潰す勢いで迫って来た。李達は僅かに身体を右に寄せ、左手の板斧を地に平行に放った。鎖が伸びきり、がちゃんという音がした。放った板斧は李達の左手に戻っている。

馬が土煙を上げて倒れ込んだ。馬の前脚は、二本とも膝から下が失われていた。

「ぐおう」

叫び声を上げて、具冠が李達の足元に転がって来た。李達が右手の板斧を振り下ろす。板斧が具冠の腹を割いた。飛び出した腸を手で押さえながら、具冠はやがて動かなくなった。

李達は前方に目を遣った。

曹瑛が、休む間もなく矢を放っている。一人一矢、正確に兵を射抜いている。水月が、踊るように兵の突き出す槍をかわしている。石勇は、群がる兵達の中で鉄棒を振り回している。その勢いに、兵達は逃げ腰になっていた。

「矢だ、弓隊を出せ」

兵の一人が叫んだ。

槍を突き出していた兵達が一斉に退いた。

「まずい」

李達が呟いた。

「曹瑛、石勇、退くんだ」

だが、李達の声は二人に届かない。

槍を持った兵達が二つに割れた。指揮者が死んだというのに、見事に訓練された兵だった。突然、何十もの矢が飛んで来た。曹瑛を狙っている。駄目か。李達の心の臓が縮んだ。

曹瑛が地に転がっていた。矢はその上を飛び去って行った。水月も横になっていた。水月が咄嗟に横に倒れて、曹瑛を矢から守ったのだった。

「水月、見事だ」

李達はそう言って、弓隊に向かって走った。

右手の板斧を地すれすれに投げた。鎖が伸びきると、それを大きく振り回した。石勇が退いてくる。唸りを上げて回転する板斧が弓兵の足を襲った。数人の弓兵が倒れ込んだ。中には、足を失った兵もいる。

李達は雪華を括り付けている紐を解いた。

「曹瑛、嬢さんを水月に縛るんだ。ここからは儂が先頭に立つ。おまえは嬢さんを」

曹瑛は頷き、石勇と二人で、立ち上がった水月に雪華を縛り付けた。

雪華の後ろに曹瑛が乗り、その身体をしつかりと支える。

「石勇、後ろから来る敵は任せた。儂は前の敵を崩す」

「分かりました」

石勇の声には力が漲っている。

李達の板斧が再び回転しだした。三回転ほどで、空気を震わせるような音を上げた。弓兵が後退する。逃げ遅れた数名が、手足から血を噴き出させていた。李達は板斧を回しながら前進を続けた。

突然、兵達の後方が騒がしくなった。城門に続く道で狭くはないが、これだけの兵が犇いていると後ろの様子は全く分からない。すぐに兵達の悲鳴が聞こえて来た。どうした。李達は訝った。

弓兵が前方に押し出されて来た。すかさず李達は、前に出て来た弓兵を斬った。次々と弓兵が押し出されて来る。二人三人と続けざまに斬った。李達の全身は血に染まっている。弓兵が左右に割れた。

「陳統」

李逵が叫んだ。

「小父さん、こっちだ。南門を抜けるんだ」

陳統が妙な武器を振り回しながら叫んだ。その武器で、兵の肩を砕いたり首を刺したりしていた。

「南門は開いているのか」

「番兵は全員倒した。今、晁蓋が門を押さえている」

「よくやった」

李逵は後ろを振り返った。

「曹瑛、聞いたな。一気に突っ切るぞ。儂らのことは構わず、水月を駆けさせろ。南門で待つんだ」

曹瑛は黙って頷いた。かなり疲れているはずだが、曹瑛の目に疲労の色はない。曹瑛が水月の横腹を蹴った。水月は背に乗せた二人を気遣いながら、割れた弓兵の間を駆け抜けて行った。その後ろを、李逵と陳統が兵達を弾き飛ばしながら追って行った。石勇が鉄棒を回してそれに続いた。

晁蓋が、開いた門の真ん中で仁王立ちになっていた。足元には、門を守っていた兵士の死体が横たわっている。曹瑛は門の手前で水月を停めた。

「雪華は」

晁蓋の声には不安が混じっている。

「ひどい火傷をしているの。何か薬が使われたみたいで、意識を失くしたまま」

晁蓋の目が怒りに燃えた。

「ちくしょう、何てことしやがる。黄文炳と魯權の仕業だな。あいつら、絶対ぶち殺してやる」

「魯權は死んだわ」

曹瑛が静かに言った。

「そうか……。俺の手で殺したかったぜ」

晁蓋が悔しそうに柳葉刀を一振りした。

「それで、晁蓋様。退路は」

「それがな、ちよつと面倒な状況なんだ」

晁蓋が門の外を指差した。

騎馬の兵が、二里ほど先に列をなしている。

「禁軍だ。五百ほどいやがる。重装備じゃないが、俺達とは比べもんにならねえ」

「黄文炳が手を回したのね」

「最初は西門にいたらしい。おまえ達が派手にやらかしたんで、こつちに回って来たんだ。もつとも、俺達もその騒ぎでおまえ達の居場所が分かったんだがな」

「どうしよう……」

「無用の親父に任せるしかないようだな」

李達達三人が走って来た。

曹瑛の見つめる先を窺って、李達も状況を察知した。

「禁軍の騎馬隊か。厄介だな」

李達は、晁蓋を見て言った。

「無用のおっさん。その二挺斧は……」

「そうだ、儂は李達、かつて黒旋風と呼ばれていた男だ」

晁蓋が息を呑むのが分かった。

「そんなことはどうでもいい。今は、どうやってここを突破するかだ」

「何か……策はあるのか」

晁蓋の口調はいつもと違っている。

「待つだけだ。出来る限りここでもちこたえる。それしかない」

晁蓋は黙ってしまった。待っていたらこっちは潰されるだけだ。いかに黒旋風といえども、これだけの禁軍の前では打つ手がないということか。晁蓋の胸に不安が込み上げて来た。

「李達様、雪華姉さんに水をあげなくては」

曹瑛は、石勇の担いでいた荷から鶏冠壺※を取り出した。以前遼か

ら仕入れた物で、陶製ではなく革製だったので、持ち運びに便利だった。中の水を口に含むと、曹瑛は口移しで雪華に水を与えた。

※鶏冠壺 水、乳、酒などを入れる遊牧民の携帯容器

雪華の瞼まぶたが微かすかに動いた。

「雪華姉さん、しつかりして。分かる。曹瑛よ」

曹瑛の声に、雪華はゆっくりと目を開けた。

「曹瑛……どうして、ここに……」

「わたし達、姉さんを助けに来たの」

雪華の目は、まだ焦点が合っていないようだ。

「あれは……」

雪華は李達達を見た。

「無用の小父さん、石勇、陳統、そして晁蓋様。皆、姉さんを助けに来たの」

雪華は暫く李達を見つめていた。

「そうですか、無用……黒旋風に戻してしまいましたか……」

雪華は再び目を閉じた。

「まだ完全じゃない。でも大丈夫。きつとうまくいくわ」

曹瑛の顔に喜びの色が浮かんだ。血と土埃つちぼこりで汚れてはいたが、曹瑛の顔は輝いている。

何て綺麗なんだ。曹瑛の顔を見て、そんな時ではないと思いつつも、

晁蓋は感心した。

「陳統、どうだ。奴らに動きはあるか」

いつの間にか城壁に登っていた陳統に、李達が訊いた。

「じつとしてるよ。戦意が感じられないな。奴ら、攻めて来る気はないようだ」

「そうかもしれんな。こんなことは、自分達の仕事ではないと思っておるかもな」

「つけめだね」

「そう都合よくはいかんさ。儂らが門を抜けたら、一斉に攻めて来るぞ。門から出ないうちは自分達の仕事じゃない。そう思っているだけ

のことだ」

「そういうことか。小父さん、とりあえず俺は弦月を呼ぶよ」

「呼べるのか」

「ここからなら大丈夫」

陳統は、小さな笛を取り出して吹いた。

音は聞こえない。

「犬と同じで馬も耳がいいんだ。手綱を繋いでるけど、弦月は自分で解ける。すぐに来るさ」

千を数える間もなく、弦月が姿を現した。もう一頭、後ろを駆けている。二頭はやがて並走し、禁軍の横を擦り抜けて南門までやって来た。

「弦月、待たせたな」

陳統が、そう言って弦月の首を撫でた。

「俺の馬も来た。助かった」

晁蓋は感心しているようだった。

「それでも、二頭だけでは禁軍を抜けるのは無理だろう」

李逵は暫く考え込んでいた。

「俺と陳統が禁軍に突っ込む。その間に逃げるっていうのは」

晁蓋が真剣な目で言った。

「駄目だな。おまえと陳統の二人では、十人を足止めするのがせいぜいだ。歩兵とは違う。」

それに農は、そんな見込みのない策は採らん」

「じゃあ、どうするんだい。このままじゃ埒があきそうにないぜ」

李逵は晁蓋から目を離した。

「待つしかない。時が来るのを」

曹瑛は、そんな李逵をただじっと見つめるだけだった。